

学位論文審査の要旨

学位申請者	張 慧穎 人間発達科学専攻2019年度生		論文題目	ダブルディグリー・プログラムにおける中国人留学生の満足度とその関連要因
審査委員	主 査:	浜野 隆 教授	インター ネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	富士原 紀絵 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	大多和 直樹 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	池田 全之 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	齊藤 彩 助教		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 社会科学			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Intercultural Education)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本研究は、ダブルディグリー・プログラムに参加する留学生の満足度の関連要因として、留学中に直面する困難、留学動機、困難への対処方略を検討したものである。研究対象としては、日本へ留学する中国人留学生が事例として検討されている。

第1章では、国際共同学位プログラムの発展と動向を整理したうえで、国際共同学位プログラムの中でもダブルディグリー・プログラムの実施が多いことが指摘されている。続く第2章では、世界の留学生の動向をふまえ、日本での留学生を取り巻く環境について整理したうえで、日本文化の特徴と留学生が直面するカルチャー・ショック、異文化適応の過程などが検討されている。そして、第3章では、留学生の満足度に影響する要因について、留学生活で直面する困難、留学の動機、対処方略などがあげられ、対応する学説として第4章ではストレス、動機、対処方略に関する諸理論が検討されている。

そして、第5章以降が実証研究となる。第5章では、ダブルディグリー・プログラムに参加する留学生の困難の内容について質的分析を行い、来日前の情報不足、専門分野の不一致、来日後の人間関係などが困難として示された。第6章では、留学動機と困難の関係を分析している。その結果、消極的な留学動機をもつことと、留学後にさまざまな困難を感じやすくなることとの関連を明らかにしている。第7章では、困難と対処方略との関連が検討されている。困難に対処する方略としては、「気分調整」、「問題回避」、「問題解決努力」、「他責化」、「サポート希求」の5因子を抽出し、ダブルディグリー・プログラム留学生は、困難を感じたときに消極的な対処方略を取る傾向があることが示された。第8章では、留学生のダブルディグリー・プログラムに対する満足度とその関連要因について質的分析が行われ、留学の満足度を低下させる要因として、「留学期間」と「手続きの煩雑さ」を、満足度を高める要因として、「留学による自己成長」、「キャリア意識の向上」、「ダブルディグリー・プログラム制度の利便性」を指摘している。最後に、第9章では、留学効果・総合満足度と困難への対処方略の関連について計量的に分析されている。留学効果（「能力の向上」、「教員との関係の構築」、「グローバル意識の高まり」、「人間関係の充実」、「外国人との交流」）および総合満足度と対処方略（「問題解決努力」、「問題回避（情動）」、「問題回避（行動）」）の関係を分析した結果、「問題解決努力」が、留学効果・総合満足度と関連する重要な要素であることを見だしている。終章では、以上の分析を踏まえ、ダブルディグリー・プログラムの改善に向けて、中国と日本の大学それぞれにおけるDDP留学生の教育と支援のあり方について提言をしている。

第1回審査委員会（2022年12月14日）では、日本への留学生の中でも中国人留学生ならではの特徴、ダブルディグリー・プログラムの構造と性格、心理学の尺度を用いることの利点と限界、異文化間ソーシャル・スキルの教育に関する指摘や疑問が出された。これらの指摘を踏まえて修正作業が行われ、第2回審査委員会（2023年1月30日）では、指摘事項に対して適切な対処がなされていることが確認された。2023年2月27日に行われた公開審査会においては、研究全体にわたって発表がなされ、出席者からの質問に対しても適切な受け答えがなされた。その後に行われた最終審査委員会（2023年2月27日）では、公開発表と質疑への応答が十分なものであったことが確認された。以上の結果より、本審査委員会は、本論文が博士（社会科学）、Ph. D. in Intercultural Education にふさわしいと判断し、合格とした。